

ギリシャの旅

ヨーロッパの旅

平井信義

アテネ郊外の飛行場に着いたのは、八月も半ば過ぎ。快晴の空からは、強い日が背中にしみ入つてくる午後であった。

ギリシャという国が古い歴史を持ち、しかも世界史上に輝かしい文化を残したということは、子どもの頃からの知識であった。パルテノンの神殿、ミロやシレネのヴィナス、ラオコーンの群像などから、当時の文化への想いは、私の子どもの時ばかりか、成人になってからも、たびたびギリシャへの憧れとなつてくるのであった。特に、医学の頃、ギリシャ文学の翻訳に熱中しておられた恩師、小川恭政先生のお宅を訪れる機会がふえてから、古いギリシャの町々が、美しく私の脳裡に刻まれるようになつてゐた。

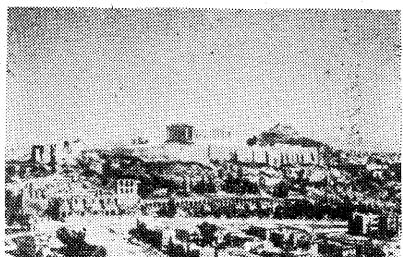
飛行会社の事務所から案内されたホテルの部屋は、エレベーターで上った四階にあつた。鞆を運んでくれたボーイに、まだ見慣れない硬貨（ドラクマ）を渡すと、「これでは少ない、もっと別なお金が欲しい」とポケットをのぞきこまれたりした。そのような些細な

トラブルをすませると、あまり上等でない木の椅子に腰を下し、私はホッと一息ついた。西ドイツを出発したのが七月半ばであつたから、その後スエーデン、デンマーク、イギリス、フランス、イタリーと、すでに一ヶ月の旅になる。ズボンの筋目も消え、ナイロンのYシャツの襟も黄ばんで、それらが私のからだの疲れをよく反映しているような気がした。しかし、「いよいよ、憧れのギリシャに来たのだ」という気持が、私のからだを引き起した。

椅子から立上つた私は、西日が射し込んでいる窓辺に倚つた。そこに初めて、はつきりとバルテノンの神殿を正面の高台に仰いだのである。真白な柱の列の上に、半ば壊れ落ちた破風をのせたこの神殿は、真青に澄んだ空に聳え、柱の縦縞は、やわらかいふくらみの中にはつきりと影を刻み込んでいた。ゆらぎなく、一ときわ高く、白い輝きは、更に西日を浴びている。私はアテネに来た自分を祝福した。

神殿を支え

ゆっくりした足取りの私を追って、兵隊の一群が勢よく上ってきた。そして、早足に私を追い抜いていった。若い兵隊であったが、よりよれの軍服に短剣だけを吊つて、足並みも揃わずに上っていく。いうよりも、丘と有様を背後から見ていると、第二次大戦争の末期に馳り立てられたわが国の応召兵を思い出した。



フィロバッパスの丘から、バルテノンの神殿を見た光景。この丘には、ソクラ特斯が入られたという牢獄があった。

り見せた断崖
の上の台地
に、神殿は建

てられてあ
た。その断崖
を背にして、

その麓に、点々と小さな灯がともり、次第に町の灯もまたたきを始める。急に聞きなれない太い声が、わめくが如く歌うが如く、私の背後にきこえ始めた。読経が始まつたのであつた。極く小さな祠が立つていて、読経はその中からきこえてくる。案内書によると、祠はギリシャ正教の修道院ということであつた。

私のあとから上ってきた人が二人三人、その祠の前をあちらこちらと歩いていたが、やがて裏手の方に去つて、リカベットスの頂には、たつた一人、日本人のみが残されて、読経の声を肌身に感じていたのである。私は、地球上にたつた一人残されてしまつたようだ。このまま天にかけ上れそうな感じがした。不思議な感じであつた。

しばらくの間、同じ姿勢で立つたまま、去り難い気持ちにとらわれていたが、いつまでも続く読経の声を振り切つて、私はリカベットスを駆け下りた。
間もなく、私はホテルを出た。町の中を北東に、くねくねした道を登つて、リカベットスの丘を目指して歩いていた。道を角で曲るたびに視界がひらけて、アテネの町並みが四方八方に流れているのが手によるように見えてくる。町のつくる所、三方が丘陵となり、南西がサラミス湾に向かつて傾斜した平野にアテネ市が位置してい
たが、どの丘陵も、樹木らしい樹木がなく、むしろ荒れ果てた感じがしたし、町の中にも旧蹟をのぞいては特に目をひくものがない、私の空想とはかなりかけ離れたアテネであった。

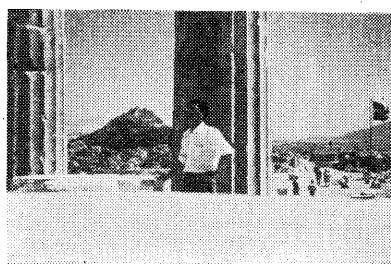
夜の町はにぎわっていた。昼間よりも人通りが繁くなっていたし、黒い髪で、肌は茶色いギリシャ人に、ヨーロッパでは感ぜられない親しみを感じた。その人々は、昼間の暑さからほつと息をついたような表情で歩いていた。服装などから、裕福でない人が多いのが目についた。

私は多少の空腹を感じたので、レストランを探したが、どうも思うような店がない。中に大勢たむろして大声を立てたり、のぞけばひそり閑として果して店を開いているのかどうか、分らない状態であった。英語で話しかけても通じないし、こちらもギリシャ語がわからない不安に、私は同じ道をいったたり来たりした。

遂に、コンコルディア広場に出た。そのほぼ中央に、露天のまま沢山の食卓が並んでいて、二三の客からボーイが註文をとっている光景が目にとまつた。私はその一つに腰を下す決心をした。

すぐに一人のボーイが寄って来た。そしてメニューを差し出して何か言った。私が彼の目を見上げていると、ボーイは微笑んで「エッグ？ ミート？」と英語の単語だけを並べて、メニューを指差した。そこには、煙のような形に書き並べられたギリシャ文字の下に、英語で食べ物の名前がかかれていた。ビールの他、何を註文したか

忘れてしまった。しかしボーイが立ち去るや否や、競うように二人の子どもが私の所に裸足のまま走ってきた。その姿は、今でもしばしば蘇ってくる。それぞれ腋の下に小箱をかかえ、左手で私の靴を差している。一人の子どもはすでに、小箱を私の靴先において、何



バルテノンの神殿に立つ著者。柱と柱との間から、リカベットス山が見える。この山上の祠では、髪を長く垂れた人が、奇妙なお経をあげていた。

か言いながら
私を見上げて
いる。靴磨き
の子どもであ
つた。靴を磨

かしてくれと
いうのであ
る。私は断つ
てさかんに手
をふった。し

かし、なかな
か執拗である。自分の靴墨がいい品物だというように、箱の中から缶を出しては、蓋をひらいてみせる。残念ながら、私の靴は、普通の油をぬっては駄目になるという品物であった。私も、自分の靴を差し、靴墨を指して手を横にふった。それでも立去らずに、私の前から離れない。

その時、註文をとったボーイがビールの注いであるコップをもつて戻つて來た。

そして、私の困惑した顔を見るや、怒ったような顔付きをして、子どもに何かいった。それでも退こうとしない子どもを、難を追つような手つきで何回となく追い払う。遂に子どもたちは、私の前から去つていった。



アコボリス（ルバテノン神殿のある高台）から市街
を見下ろした光景。手前にディオニソス劇場、遙かに
第一回オリムピックの開かれた競技場が見える。

しかし、ボ

ーイが立ち去
ると、また別
の子どもが近
寄って来た。

同じように
小箱をかかえ
ている。私は
「もういらな
い」というよ
うに、大きく
手を振つてみせた。その子は、あきらめよく立去つていったが、次
々と他の子どもがあらわれてくる。

気がつくと、実にたくさんの靴磨きの子どもが、この広場を右往
左往している。そして、腰を下した客に近寄つては、靴を磨くこと
をねだつてゐるのであつた。その有様は、終戦直後の日本の状態以
上であつた。

そればかりではない。この広場の客に愛想をつかしたのか、みす
ばらしい電車が来てとまるとき、「三人の子どもは、足を車輪の上の
金具にかけ、うまい具合に電車の横腹のところへつかまって、やが
て動き出した電車とともに、町角を消えていった。運転台がむき出
しの小さな電車は、だあん、だあんという音ばかり高く残して、私
の視界から去つたのである。

再び私の前に立ちふさがつた子どもも、裸足であり、それはすね
の上まで埃にまみれていた。青黒いズボンの上にずれ落ちた白いシ
ヤツも垢でよごれ、くるくるとカールした髪の下で、まなざしのみ
が眼窓の深みから私を愛らしく見詰めていた。私は英語で「齡はい
くつ?」とたずねてみた。が、しかし通ずるはずがなかつた。その
子どもは、話しかけられたことが靴磨きの註文かと合点して、小箱
を下に下すや、私の靴を指差しながら、私を見上げた。「そうでは
ないんだ」と日本語が口まで逃り出るのをおさえながら、私は大き
く手を振つて「いらない、いらない」という表情をしてみせた。そ
れを素直にとつて、その子どもは再び小箱をかかえると、新しく來
た客の方へ移つていく。その顔には、しかし、憤りの表情は微塵も
見られなかつたのである。

二千年前には世界に冠たる国であったギリシャ。恐らく、当時の
アテネに住んでいた人々は、ギリシャの繁栄に酔い、子どもたちも
自國のゆたかな文化を信じて疑わなかつたことであろう。まして、
後世において、たくさんの子どもたちが、靴磨きとなつて生活に喘
ぐだろうなどとは考えてもみなかつたことだろう。私はビールの酔
いが廻るにつれて、涙のにじみ出でてくるのを感じた。

翌日も天候に恵まれて、私はバルテノンの神殿にいった。現在は
十五本しかない石柱も、当時は一〇四本もあつたというから、その
偉觀はたいしたものであつたろう。

しかし、その破風はすでに英國に持ち去られ、大英博物館を飾っているということであった。私がホテルの窓から眺めたバルテノンの祠も、昔の破風はほとんど壊れて、その残骸が石ころのように転っていた。

そこから見下ろしたアテネの町は、眠っているように思えたし、すぐ下に見える、ディオニソス劇場も、草で幣れていた。

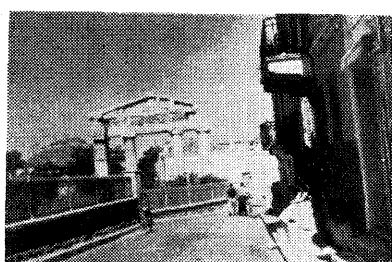
ディオニソス劇場の石畳の上にもただ一人立って、茫然とあたりを見廻した。

石畳の間、到る所に生えている草々を見やりながら、当時の貴族がここで観劇したことを探おうとしても、あまりに現実の光景の方が強く私の心を捉えてしまっていた。貴族が腰を下したという石の坐席に腰を下してみたり、もう一度舞台の真中に立って、当時は五千人も収容したという段々になった坐席を見廻したりしたが、どうにも落付けない気持になって、近くの叢の中に腰を下すや、のけぎまに倒れた。

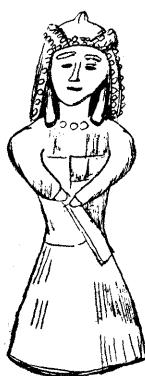
空は相変らず青く、太陽はじりじりと私の顔を照らした。名の知らぬ鳥が二羽、アクロポリスの方から飛び立つて、東の空の方に消えていった。

この空は、二千年も前の空とは変りなかつたはずだ。

しかし、こうして一日日本人が、このような場所にねそべろうなどとは、当時の賢人たちにも思い及ばなかつたことであろう。私は、美しい顔立ちに装いを凝らした当時の貴族たちが、このあたりを三



アドリアン図書館あとからローマ市場へいく道。ギリシャの女の子が3,4人いた。



々伍々相携えて散策したロマンチックな光景を想像しようとしたが、すぐにかき消されてしまった。「ギリシャに来ているのだ」と、今更のように自分に言いきかせている中に、私はとろとろとまどろんでいた。